
悪女は何を狙う？

えみりあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪女は何を狙う？

【Nコード】

N4970N

【作者名】

えみりあ

【あらすじ】

突然亡くなった祖母「和泉花枝」。その祖母が残した莫大な遺産は孫3人で争うことになった。周りは敵だらけ。何が何でも遺産全てを相続したいとたくらむ椿は、自分を慕う者をうまく利用することを決めた・・・！？

登場人物

和泉 椿【いずみ つばき】

19歳。誰もが振り向く美人というわけではないが、整った愛嬌のある顔。

柊、堇とはいとこにあたる。

自分の使い方、周りの動かし方を理解している若き策士。

周りのことには聡いが、自分のことに関しては疎い。

祖母花枝の遺産に関しては、何が何でも自分のものにしようと企んでいる。

和泉 柊【いずみ ひいらぎ】

23歳。美しい、世に言う「美形」の顔をした青年。

椿、堇とはいとこにあたる。

幼い頃から椿のことを想っている。

花枝の大事にしていた遺産の内の会社だけは何とか自分の物にしたいと思っている。

吉志 堇【きし すみれ】

23歳。清楚な美しさを持つ美人。

椿、柊とはいとこにあたる。

幼い頃から柊を想っており、その柊が想う椿を少し疎ましく思う。出来れば花枝の残した遺産は自分の物にしたいと思っている。

小野 直樹【おの なおき】

27歳。秀麗な顔をした青年。

父親から弁護士事務所を引き継ぎ、和泉家の顧問弁護士となった。自分に頼ってくる椿のことを想っている。

和泉 花枝【いずみ はなえ】

70歳。

椿、柊、堇の祖母。

女手一つで子どもを育て上げ、若くして亡くなった夫から引き継いだ会社を一代で大きくした。

1) 遺産相続

「これから、貴女様には遺産争いに参加していただきます」

いつでも冷静沈着な顧問弁護士が、苦々しげな表情をして私にその悲報を伝えた。秀丽な顔は、どんな表情をしても美しい。これは神様を恨むしかあるまい……。

「これは花枝さまの決定です。どうか抗うことはなさらないでください」

そこで祖母の名前が出てくるとは思わなかった。祖母は体は弱いが、その分勝気な強い性格をしている人で、遺産の話をこんなに早く持ちだしてくるとは思わなかった。

「分かってます。しょうがないことですから」

随分前からその話は身内の中で持ちあがっていた。祖母である花枝は、まだ現役で会社の経営に携わっており、「遺産」という言葉の「い」の字も口に出したことは無かった。だから、どうなるんだろうと身内の間では話題になっていたのだった。

「他の方々にはもう伝えてあります。皆様、本家の方に集まっております」

私が遅れてしまったては話し始められないだろう。意地の悪い親戚どもは、口々に私の両親を責めるに違いない。

少しでも急ごうと、タクシーの運転手に「急いでください。」と口早に頼んだ。

2) いとはライバル！？

「皆様、お集まりいただけましたね」

広いリビングには親戚一同集まっていた。一番遅くに駆け付けた私のことを、きつい目つきで見てる。

「誰かさんは一番遅くに来たけどね」

私と一番年齢の近い従姉が嫌みな言葉を私に放つ。彼女の名前は堇。堇の花言葉「慎み深さ」とは全く異なった性質を持つ女だ。見た目は清楚な美女なのに、全く中身は違う。

「そう責めるなよ。椿だって、大学があって忙しかったんだから」

私を庇ってくれたのは従兄の柊。彼は昔から私に優しくった。幼心に、柊は私のことを好いてるのではないかと思ったほどだ。

「そんなことを言ったら私だって仕事があったのよ。それでも一番最初に来たわ」

仕事と言っても、彼女の父親の会社で受付嬢をしているだけだ。そう難しい仕事ではない。いつでも抜けて出て来れるような楽な仕事場。

「すみませんでした。少し、道が混んでいたのです」

「気をつけなさいよね。椿さん？」

ニヤニヤと真つ赤な唇を三日月に歪ませた董は、ただのそこらへんの娼婦にしか見えなかった。

「では花枝様、お願いします」

陰険な雰囲気を取り裂くように、小野が横から割って入ってきた。

70代には見えない若々しい祖母。これで女で一つで子どもたちを育ててきたというのだからすごい。それに加えて一代で会社を大きくしたのだ。

「私も最近、病状が酷くなってきた。だから私の遺産を相続する者を決めたいと思う」

その言葉に嬉しそうな表情をする親戚一同。特に、祖母の子供である、董の母親、柊の父親、私の父親は勝ち誇ったような顔をしている。相続するのは自分だとも言いたいのだろうか。

「董、柊」

呼ばれたのはいとこの名前。

「それに、椿。前へ出なさい」

辺りがシンと静まりかえった中で呼ばれた自分の名前。それは、ずいぶん不気味に聞こえた。

周りが一番後ろに座っていた自分のことを振り返って見つめる。隣に座る父親に、「前へ出なさい」と言われ、バクバクと鼓動する自分の胸を押さえ、一歩ずつ足を前に進める。

「この子達が私の遺産を相続する可能性のある三人だ」

その言葉を聞いた一人が立ち上がり、異議を唱える。

「いくらなんでもそんなに若い子なんて……！！椿なんて、ま

だ20歳にもなっていやしないですか！」

「私は一族の中でも血の濃い三人を選んだ。私の直系の孫だ、相応しいだろう？これから和泉の家を背負っていくんだ。若い子の方がいいだろう」

凜として答える祖母。その言葉にはよどみなど無く、異議を唱えた方も言葉に詰まり、引き下がった。

「可能性があると、ということですかお婆様？」

猫なで声で訊ねる董。彼女の中では自分が遺産を相続することが決定しているのだろう。

「この三人で遺産相続を賭けて競ってもらう。勝利した者が【和泉】の家の全てを継ぐんだ」

周りがざわつく中、私の頭の中はおかしいくらいに冷静だった。

3) 決意

競い合い発表から一夜明けて、ある者はそれを考え出した和泉の家の現当主、花枝にどういうことかと怒りをあらわにし、ある者は勝利する可能性の高い23歳組（柊・董）に媚を売ることにいそしむことにしたようだ。

「私が勝つ可能性は無いって、思ってたの？」

まあ、分からなくもない。19歳の小娘と23歳の大人だったら、どちらが勝つかなんて一目瞭然。

「でも、勝つのは私」

そろそろ飽き飽きしていた頃だ。この人生には。この【和泉】の家は、私にとって甘くはなかった。いつでもどろどろしていて、誰が祖母の遺産を相続するだとか、そういう話ばかり。その魔の手は私にも忍び寄ってきて、しかも絡みついたら離そうとはしなかった。

私の父親は、祖母花枝の次男である。幼い頃はさほど生活が豊かでは無かったため、甘えたお坊ちゃん気質に育たなかったのが幸いだ。祖母から譲り受けた子会社を自分の力で軌道に乗せた。そこを祖母

は大きく評価していたようで、長男よりは遺産を相続する可能性は高いと周囲からは言われていた。

だからこそ、柊の父親、董の母親からは敬遠されていた。それは私にも同じようで、特に董の母親は私のことを毛嫌いしていた。娘の董も同じように。

でも、柊は違っていた。もつとも忌むべき存在の私に幼い頃から異様に優しくかった。いつでも私の傍にいて、いつでも助けてくれた。それはもう、世に言う「アッシー君」と言ってもいいほど。

「終わりにしよう」

この19歳の小娘にも優しくない世界を。

私が勝利して遺産を相続することとなったら、もう何も言わせない。

周囲からの圧力や、酷い言葉。

幼心に傷ついた、その復讐も兼ねられる。

「ありがとう、花枝おばあちゃん」

絶好のチャンスを与えた祖母に感謝を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4970n/>

悪女は何を狙う？

2010年10月14日22時43分発行